浄土真宗本弘寺婦人会だより

平成１３年９月　　第１２号

「彼岸に思う」

以前、京都藤田ホテルの屋上ビヤガーデンで、素晴らしい光景に出会った。東山から満月が昇り、西の山に真っ赤に燃える太陽が沈んでいく姿を、同時に見ることができた。
大きな感慨の中に、西方浄土の世界が想われたことでありました。
太陽が東から昇り、西に沈むことから、人間が生まれ、そして帰るべき目的とするところを、釈尊は西方と表現されたのでありましょう。
秋の彼岸を迎えました。秋は寂しいと誰しもが言います。私もそうでした。そうでしたと言うことは今は違うということです。今は、秋は心落ちつけるのです。私には安らぎの季節なのです。活気あふれ、活動的な夏季が終わって、草も木も動物も休息に入るのです。空が澄みわたり、大自然全体が穏やかに静まる時であります。
心静かな穏やかな落ち着いた環境を誰しもが願っているのではないでしょうか。仏道修行の究極の目標は、涅槃寂静の境地に至ることです。涅槃寂静とは燃え盛る煩悩の火が吹き消され、苦の無い静かな安らぎの座につくことであり、決して寂しいことではありません。
私たちの人生には、怒りや悲しみそして悩みなど、雑多な不都合なことが次々とおこります。欲と欲とがぶつかり合い、心傷つき、複雑な人間関係で心痛め、夜眠れぬ日もあります。そうした煩悩の世界から逃れて、悩みも、悲しみも、怒りも、恨みも無い、清らかな安らぎの世界に生活したいと願うのは当然のことです。争いや恨みなど一切の苦のない、ただ感謝と喜びにあふれた理想の境地それが浄土です。そうした浄土の生活を願うことがもっとも大切なことではないでしょうか。
掲示板に“死んだらどうなる　これが人生の一大事”と書かせていただきました。
彼岸会の中で仏法聴聞の中にお考えになってください。

合掌

佛はいつも
　見てござる
　　聞いてござる
　　願い通しでござる

読　者　の　広　場

「婦人会へよせて」

婦人会へ入る前は、毎日が忙しく、仏様のことは何もわからず過ごしておりました。
今は亡き先代の住職様の法話を聞かせていただいた中で、忘れられないことがあります。
“皆さん、お浄土（あの世）に行くことは何も寂しいことではないんですよ。
今生きている友達よりもたくさんの、亡きご先祖様や、
多くの親類がお浄土にはおられます。”
とのこと、本当にそのとおりでございます。また、坊守様のお話も胸にこたえております。
“人生は汽車に例えれば三十歳まではどんこう列車でとても遅いです。
五十歳過ぎたら急行列車で速いです。
七十歳過ぎたらジェット機で目が回ります。”
私も八十歳を過ぎたので、いつジェット機が落ちますかねぇ。
毎月の定例会にお参りできて、住職様の法話を聞かせていただき、本当にありがたいことです。また、婦人会員の方、役員さんもとても優しく面倒見がよいので、楽しみにして、今後は体に気をつけて、皆様にお会いできることを心がけます。

片桐　志代

お彼岸や
　　白玉だんご母想ふ

眺むれば庭に咲いたる菊の花
　　あの世の母に香りとどけよ

矢部　克子

質問コーナー（何でもお答えいたします）

Q　よく歎異抄がどんな世にもたくさんの方々に読まれ、
隠れたベストセラーといわれますが、歎異抄とはどんな書物ですか？

A　著者は親鸞聖人の教えを直接受けられた河和田の唯円（ゆいえん）という方で、
唯円が聖人亡き後、聖人の御教えが異なって伝わることを嘆き著された抄で、
１巻１８条からなり、前半は唯円が聖人から直接聞かれた御教え、お言葉を記し、
後半は当時世に流れていた異説を指摘し正しい信心に目覚めさせようと、
聖人の御教えを正しくいただいた、唯円の信心が、明快に述べられている書でございます。
是非あなたもご一読ください。